

一九九四年度国文学会集報

一九九四年度国文学会活動状況

△新人生歓迎会▽ 四月五日 新島会館

△国文学会総会、研究発表会▽ 六月一九日 至誠館会議室

・総会

・研究発表会

「屋代本平家物語」本文に関する考察

―その位置づけをめぐって―

谷村 茂（大学院博士課程後期課程）

「冷笑」をめぐって 山崎 澄子（大学院博士課程後期課程）

△専攻創立四〇周年・学会設立三〇周年記念 竹田からくり上演▽

一〇月九日 至誠館

△専攻創立四〇周年・学会設立三〇周年 記念講演会・記念パルティ▽

一二月二日

・講演会 至誠館

「日本の中の騎馬民族」

「紫式部の生き方」

・パーティー 宝ヶ池プリンスホテル、プリンスホール

△同志社国文学▽

第四一号（専攻創立四〇周年・学会設立三〇周年記念論文集）

一九九四年一月二二日発行

第四二号 一九九五年三月二〇日発行

△国文学会会報▽ 第二号 一九九五年三月二〇日発行

一九九四年度卒業論文題目

家持の「うつせみ」観

山部赤人の「望不盡山歌」考

「古事記」における大國主神

―亦の名を通して見る存在の意義―

崇神八年紀歌謡三首に関する一考察

萬葉集における辞世歌

―仮託の方法を通して―

持統・文武朝における皇子歌の意義

―人麻呂歌集の表記との比較を通して―

遊行女婦についての考察

旅人における吉野観

初期萬葉集の相聞歌

―大宰府遷任以前の歌を中心として―

石井京子

井上崇子

今井麻貴子

上田ありさ

北村厚幸

倉橋厚子

佐藤貴文

杉尾真紀子

垂井綾

萬葉集における羈旅歌の形成について

中 田 恭 子

——柿本人麻呂・高市黒人の羈旅歌八首を中心に——

萬葉集防人歌詠出の意図

原 恭 子

——「天平勝宝七歳二月」の防人歌を中心に——

〔萬葉集〕における「梅」に関する一考察

三 谷 恵 理 子

大伴旅人讃酒歌十三首について

森 田 晶 子

大伴坂上郎女考

山 本 雅 子

——贈答歌を手がかりに——

憶良の代作についての考察

若 山 哲 生

〔源氏物語〕の賀茂

長 田 裕 子

——物語の中の齋院を中心に——

〔源氏物語〕宴考

駒 野 和 美

「いとをかしげなる女」考

下 平 英 治

「六条わたり」考

高 橋 洋 介

——夕顔と葵上の死をめぐって——

〔紫式部日記〕五節舞考

中 山 和 美

——一条院「今内裏」をめぐって——

〔本朝神仙傳〕「浦島子事」考

安 達 百 合 子

〔今昔物語集〕における

飯 田 真 由 美

「継子いじめ」の物語

〔百鬼夜行〕考

——「江談抄」一三四「野篁卿高藤卿遇百鬼夜行」条をめぐって——

上 田 敬 子

〔江談抄〕九九条「安倍仲麿詠歌事」考

上 田 浩 司

——いわゆる安倍仲麿伝説について——

〔江談抄〕一七条「神泉苑修雨経法事」考

海 部 真 理

〔戻り橋〕考

瀧 邊 信 仁

〔江家次第〕「園韓神口傳」考

勝 見 麻 佐 子

〔江談抄〕一三八条「嵯峨天皇御時落書多々事」考

重 永 歳 繁

——「落書」に注目して——

〔染殿后〕考

矢 野 寛 子

——〔今昔物語集〕を中心に——

〔竹取物語〕におけるかぐや姫の昇天の意味

李 承 烈

——「天の羽衣」と「不死の薬」をめぐって——

〔江談抄〕一九三条の方法

渡 辺 肇

——羅城門の鬼神をめぐって——

〔徒然草〕の無常観

今 里 伊 九 代

——自然感から無常観への発展——

〔平家物語〕における六代説話について

上 野 恵

〔平家物語〕における平宗盛像

扇 美 穂

〔平家物語〕における歌人忠度

太 田 有 希

〔平家物語〕における小松家の公達

大原 理 絵

——戦線離脱とその最期——

〔平家物語〕における俊寛の宗教思想

奥 田 亜希子

——仏教は俊寛にとって救いであったか——

〔平家物語〕における「祇王」説話

中 村 早由里

——覚一本・延慶本・南都本をめぐって——

〔平家物語〕における平清盛像

藤 井 千 晶

〔平家物語〕における装束描写

星 野 岳 夫

〔西行物語〕における東国・陸奥への旅

堀 内 えり子

〔平家物語〕の構想

堀 江 朱 子

——安徳天皇を手がかりとして——

〔平家物語〕と近代文学

盧 照 眞

——袈裟と盛遠を中心に——

〔心中大鑑〕の文学的価値に関する一考察

石 脇 由美子

——二十一の心中事件を中心として——

〔東海道中膝栗毛〕と狂言の関連

出雲路 祥子

——一九の「東海道中膝栗毛」における狂言撰取方法——

〔曾根崎心中〕観音廻りについて

大河内 建太郎

鶴屋南北の地獄廻り

岡 さつき

——「独道中五十三駅」を中心に——

〔歌舞伎における限取の持つ意味〕

木 下 恵 輔

——色々な面から見た限取——

十返舎一九の往来物考

佐 藤 亜 美

——晩年の創作活動における往来物多作の理由——

近世の怪異小説と妖怪絵画の接点

城 崎 共 陽

改作としての演劇

鈴 木 理 子

——冥途の飛脚をめぐって——

〔山の段〕における定高の人物像について

高 野 智 之

——その舞台演出をめぐって——

〔二谷嫩軍記〕三段目「熊谷陣屋」における物語の構成

土 田 麻 代

——演技や趣向の型をめぐって——

世話浄瑠璃「曾根崎心中」の存在意義について

納 谷 将 一 郎

——浮世草子「心中大鑑」(3の3曾根崎の曙)と比較して——

山本角太夫「七小町」について

伯 田 智 美

——小町ものの承譜における位置づけ——

上方落語と江戸落語の相違

早 瀬 潔 葉

〔菊宴月白浪〕のパロディーについて

向 井 睦

——「定九郎」を中心に——

遊び尽くしとしての金太郎絵本

綿 貫 恵 子

三浦綾子

油 谷 千 恵 子

〔氷点〕——訴えたかった原罪

有 吉 洋 子

〔盛装〕論

有 吉 洋 子

——横光文学における長篇恋愛小説の位置づけ——

有島武郎「石にひしがれた雑草」

——その成立について——

石崎直子

大岡昇平「偽悪」的表現の考察

板倉圭祐

「私」は「先生」を裏切ったのか

——「心」のその後——論

井上建司

内田百閒

——父・息子に対する思いとその小説への影響——

尾上弥生

太宰治の「パンドラの匣」におけるパロディについて

尾田旨示

「押絵の奇蹟」

——久作の描いた女性たち——

倉澤織江

【銀河鉄道の夜】

——鳥捕りとジョバンニの父——

古村綾子

横光利一「機械」

——機械化時代の影響——

坂下千栄子

永井荷風「おかめ笹」における滑稽の考察および

「花火」との関係

阪本真子

「新ハムレット」論

——私小説という観点から——

佐藤麻里緒

「走れメロス」考

田尻美帆

「斜陽」の書かれた時代

——戦後という時代の特有性について——

田村恭子

ダダの力

——中原中也・初期ダダ詩の考察——

智原正規

「快樂」と旅する男

——「押絵と旅する男」をめぐって——

中嶋裕佳

「クラ、の出家」論

——有島の理想人間像にみる「クラ、の出家」の主題——

中島裕美子

「山月記」李徴と中島敦の不遇意識について

橋本正志

谷崎潤一郎

大正七年・中国旅行

馬場夕美子

【盗賊】に見る三島由紀夫の目覚め

——終戦によって形成された心中観——

日野里佳

「花は勁し」にみる岡本かの子の芸術観

福井紀恵

「大宰治、二十四歳、彼は『遺書』を書いたのか」

——「思ひ出」に見られる彼の心を通して——

船倉修

「溷東綺譚」の描写について

松井幸江

【金閣寺】論

——パラレル・ワールドへの旅立ち——

松本泰

尾崎翠の両性具有へのあこがれ

——ウィリアム・シャープからの影響を中心に——

森澤夕子

辻邦生「嵯峨野明月記」

——主題深化への試み——

山田あや

「Kの昇天」論

—— 彷徨する梶井の幻想的世界 ——

米 虫 直 子

漱石文学と老荘思想

李 桂 蘭

現代日本語における和語3拍名詞について

入 江 さやか

—— 出現位置別に見た音素分布の分析と考察 ——

国字の考察

岡 本 尚 子

辞書の語義説明と言語の発達段階

小 西 智 子

京都府口丹波地方における接続語の研究

関 典 子

名詞の〈数〉 日英語比較

長 井 貴 子

能楽の詞章とその掛詞

林 了 子

熟字訓の定義と「角川小辞典3・漢字の読み方」

における熟字訓の分類

日 比 野 恭 子

「スポーツ新聞の見出しに現れる懸文字について」

松 田 博 見

戯曲における話し言葉

松 本 エリハ

—— 戯曲のせりふと小説中の会話文との比較 ——

命名の傾向と意識調査

横 川 恵 子

一九九四年度修士論文題目

「源氏物語」花宴考

桑 原 もと子

日タイ古典演劇における愛と死の概念

—— 「妹背山婦女庭訓」と「ブラ・ロー」 ——

ワンラット・サンティボブ

校歌の歌詞の国語学的考察

栗 原 美和子

日本語における音訳外来語の文字表記について

—— 外国地名の漢字音訳語を中心に —— 修 徳 健

投 稿 規 定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場でありますから、進んでご投稿ください。枚数は四百字詰三〇枚以内。次号締切は一九九五年七月末日厳守。ただし、掲載論文には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任してください。